



釣り堀り

釣り堀りで偶然出会った元妻と元妾、亡くなった一人の元夫と元旦那をめぐっての激しい女の戦いは果たしてどちらに軍配が.....

釣掘り

人物

光子 元妻 55歳
春江 元妾 45歳

釣り堀。釣りをする二人の女。二人とも派手なアウトドアルック、大きな帽子にサングラスと一見本格的だが、実は釣りはうわの空。生あくびをこらえながら、ぼんやりと棹を眺めている。

光子と春江。

二人は奇しき因縁の仲なのだが、お互いにまだ気が付いていない。そのうちに、春江の棹に魚がかかる。沈む浮き。静かな波紋。

光子 あなた、引いてますよ。

春江 ?

光子 ほら、あなた、引いてるじゃないの。

気がついてあわてて竿をひく春江。しかし

光子 あらら、逃げられた。

春江 (少しふてくされて) いいんです。

光子 よくないわ。しっかり竿の先を見とかなきゃ。お魚はすばしこいのよ。

春江が竿に餌を付け直して池に投げる。竿の先を見つめる二人。そのうちにまた春江の棹に魚がかかる。沈む浮き。静かな波紋。春江の様子をうかがう光子。

光子 あなた、ほら、あなた、引いてるじゃない。

春江 あなた、聞こえてるの。

光子 聞こえてますよ。

春江 じゃあ、棹を上げたら。

春江 (光子を見て) 勝手でしょ。私あげたくないんです。おせっかい。

光子 (春江を見て) そうですよ。すみませんね。生まれつきなのよ、おせっかい。

しばらく見詰め合う二人。そのうち。

春江 奥様。

光子 春江さん。

春江 やっぱり、気が付きませんで。ごぶさたしていました。

光子 あら、こちらこそ。驚いたわ。こんなところで出会うなんてね。

同時に立ち上がる二人。すると二人の竿がからみあって。

光子 あら、ごめんなさい。(と、竿をひこうとする)

光子 あ、奥様、ひっぱっちゃダメ。

光子 でも、ほら糸が。(といいながらなおも竿をひこうとする)

光子 ひっぱっちゃダメです。そんなにひっぱっても信行さんは返しませんよ。

光子 え、！

見つめあう二人。春江が光子の竿をとって糸のもつれを手早くはずし、光子に竿を返す。そして、餌をつけてまた池に投げる二人。

光子 慣れてらっしゃるのね。

春江 いいえ。

光子 よくいらっしゃるの。ごういつと。

春江 さあ、始めてですわ。

光子 でも、慣れてらっしゃるわ。

春江 一人で来るのは始めて。信行さんとは時々来ましたわ。

光子 あら、主人と

春江 あの。釣りだけが趣味だったでしょう。奥様とは。

光子 時々。

春江 奥様、餌は小さく切っておつけにならないと、そんなに大きいとお魚の口には合いませんのよ。

光子 あら、そう。

春江 それに、こういってはなんですけど、糸が長過ぎるんじゃないですか。

光子 長いほうがいいのよ。たくさんのお魚が釣れるでしょう。

春江 私の言ってるのは仕掛けのこと。

光子 仕掛け？

春江 浮きから先が長いと餌が池の底についてしまいますわ。

光子 (少し腹立たしげに) 浮きから。

春江 そう。信行さん、奥様には教えてくれなかったのかしら。

少し、きつとなって顔をそらす光子。しばらく二人は無言で池を見つめている。

光子 そうそう、主人の葬儀の節はわざわざありがとうございました。

春江 はい、もう三ヶ月ですか。信行さんが亡くなったなんてまだ信じられませんか。その節は何にもお手伝いできませんで、失礼致しました。

光子 いいえ、他人さまに手伝っていただくなんて、そんな失礼なこと。

春江 あら、信行さん、私の家で亡くなったんですよ。

光子 あ、あなた、また引いてますよ。

春江 (チラと浮きを見て) 他人様なんて、それこそ失礼なんじゃありません。

光子 いいえ、主人は道を歩いているときに突然の心臓マヒで、

春江 ?

光子 親切な方が救急車を呼んで下さったんですが、残念なことに救急車の中でいけなくなっていましたの。

春江 あら、そうでした。その親切な方ってどなたなんですか。

光子 主人の最後にお世話になった方ですからね。ずいぶん捜したんですよ。

春江 お分かりにならない。

光子 あなたは、ご存知ない？

春江 私に分かるわけじゃないですわ。

光子 そうですわね。へんな事聞いたりしてごめんなさい。

春江 そんな方、実際にはいらっしやらないんですもの。

光子 どうして、そんなことおっしやるの。

春江 その方は奥様が作り出したお話の主人公。悲しい幻想。

光子が腹立たしげに竿をひく。餌はもうついておらず、針だけになっている。

春江 (光子の竿をちらと見て) いつのまにか大事なものを取られてしまってるのに、奥様はいつも気づいていらっしやらない。

光子が餌をつけて、それを春江の鼻先にもっていく。「キャッ」といってあわてて立ち上がる春江。光子がそのまま池に竿をたらず。

春江 (座りながら) 何をなさるんです。びっくりしましたわ。

光子 あら、あなたは鼻先にきたものは、見境なしにとびつくんじゃないかかしら。

また、しばらく無言で池をにらんでいる二人。しばらくして光子が声をかける。

光子 あなたとおつきあいしてもう何年になるでしょう。

春江 信行さんとは五年。奥様とは二年ほどかしら。

光子 わたし、あなたのことはもつと前から知っていましたのよ。

春江 気づいていらして何にもおっしやらない。

光子 古いのかしら。主人のこと、男の甲斐性なんて思っつのは。

春江 まあ、はやりませんわね。

光子 前に、私、足のけがで入院したことがありましたの。覚えていらっしやる。

春江 一度だけ私も病院まで行きましたわ。駐車場までですけど。私が車で待つているのを奥様はご存知だった。

光子 主人ったら変なんですもの。私すぐ気がつきましたわ。

春江 それで、信行さんに車椅子を押させて駐車場の前までいらして。

光子 そう、主人に無理にキスしてやりましたの。憎らしいから。

春江 でも、奥様は何にもおっしやらない。

光子 言うもんですか。それとも私ってずるいのかしら。本当の気持ちは心の奥底にしまっておくの。

春江 こわい人。

光子 あなたを殺してしまいたい。

春江 私にはとても理解できない。

光子 私の心が。

春江 いいえ、その奥様の複雑な性格が。

光子 そりゃ、そうでしょう。あなたは自分のものも他人のものも区別のできない人なんですもの。しいて言えば。

春江 しいて言えば？

光子 バカ。

突然、春江が笑い出す。笑いがとまって。

春江 奥様、それは負け犬の遠吠えというものですわ。

光子が黙って竿を引いて帰り支度を始める。

春江 あら、お帰りになるんですか。

光子 (立ち上がりながら) ええ、私の餌はこのお魚の口に合わないみたい。

春江 私を池に落として餌にしようなんてなさらないでくださいね。

光子 ねえ、春江さん、私たちお友達になりましょう。

春江 お友達？

光子 私ね、もう乗り越えたつもりなんですよ。今はもう、あなたのことは何とも思っていない。むしろ主人と縁のあった人なんですもの。これからも二人でずっと主人のことを思っ生きていきましよう。

春江 なんて、優しい、心の広い奥様。

光子 主人の生きていたころは、そりゃ包丁を持ってあなたの家の前まで行きましたのよ。でも今は、あなたを同じ思い出を語れる友人と思ってるんです。

春江 まるで、マリア様が観音様。

光子 うれしいわ。いいお友達になれて。

春江が竿をひいて立ち上がる。

春江 私も奥様に優しくしていただいてうれしいですわ。
光子 よかったわ。あなたがそんなふうに言ってくれて。

春江 でも、もう信行さんは奥様一人のものですのよ。

光子 え、？

春江 思い出が何になるんですか。生きていればこそ楽しいんじゃないありません。

光子 でも、あなたは主人との思い出のために釣りを。

春江 いいえ、釣りが好きなのは今の彼。

光子 それじゃあ。

春江 ええ、信行さんも釣りが好きだったですわ。でもあの人と一緒に行きたいとなんか思うものですか。

光子 だって、あなたはあの人を愛してたんじゃないあ。

春江 私が愛してたのはあの人のお金。だから安心してください。奥様だけですわ。

信行さんを一生愛していこうなんて殊勝な人は。

光子 あなたって人は。

春江 さあ、これで奥様ももう包丁のことなんか考えずに安らかな気分になれますわね。信行さんと奥様はお互いに認め合った愛する二人。そんなお二人に私はもともと関係ないんですもの。

光子 それじゃあ、主人はあなたに五年の間騙されていたの。

春江 奥様、よく世間の人はいうでしょう。女房の焼くほど亭主もてもせずって。

突然、光子が春江を突き飛ばして池に落とす。

(幕)